

## 軍事訓練特集：中国軍は大規模作戦準備のためのデータを収集

漢和防務評論 20180406(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国空軍の爆撃機、戦闘機、電子戦機が編隊で台湾東岸方面への周回飛行を行い、沖縄方面から西太平洋に進出し、さらに日本海にまで進入して来るのは、“大規模作戦準備”戦略のためのデータ収集であるとし、漢和は中国軍の文献を利用し細部を記事にしました。

中国空軍は、遠距離飛行を行う機種を選定に当たり、国産エンジン搭載機を除外しているようです。エンジンの信頼性が低いため洋上飛行を避けているとか。

中国軍は、“大規模作戦準備”戦略を制定すると同時に、“南海作戦方向”、“沿海作戦方向”及び“中Y（インドを指す）国境作戦方向”の戦争準備を開始し、各種データの収集と軍事演習による論証を行っている。

最近、“遼寧”号空母艦隊は再び南下、異なる機種が台湾本島を一周し、また日本海に深く進入した。これは、これらの作戦に必要なデータを収集するための具体的な行動である。實際上、これらの軍事活動自体は現実的な脅威ではないかもしれない。しかし旧式のH-6KがなぜKD-20巡航ミサイルを携行し日本海に入ったのか？なぜ台湾本島東岸方面を一周したのか？これらの異なる機種は、日、米、台の各種レーダーの監視下で一緒に飛行しており、たとえSU-30MKKの2乃至3機が護衛したところで、多くのF-15やF-16の面前では、護衛の意味はない。しかしデータ収集を行うためであれば支障はない。例えば、燃料、弾薬の所要量、航程の計算等々である。

2017年を通じ、中国空軍が上述の活動に出動させた機体は、全てロシア製エンジンを搭載した機体であり、国産エンジンのJ-10Bは1機もなかった（航続距離不足のため）。国産エンジンのJ-16やJ-11B戦闘機を上述の演習に参加させた場合、一旦エンジンに故障が発生すると、国内代替飛行場が確保できないために、敵地の飛行場に着陸せざるを得なくなる。このことから中国空軍の国産エンジンに対する信頼度が分かる。中国軍の実戦又は実戦に近い軍事演習を見れば、中国軍の抱える問題点が良くわかる。

しかしそうであっても、J-16の代わりにSU-30MKKを使用し、J-11Bの代わりにJ-11Aを使用してデータ収集することは可能だ。

中国軍の作戦部門が編集した多くの論文を本誌が閲覧したところ、データ収集が相当詳細に行われていることがわかった。特に“沿海軍事闘争準備”は、現在“反台独軍事闘争準備”に格上げされた。

この記事は、沿海軍事闘争準備に関連するデータ収集についてのみ記述する。

中国軍の仮想敵は極めて多い。台湾軍、米軍、インド軍が最も多く言及されて

いる 3 大敵国である。

”大規模作戦準備”戦略を提議する過程で、中国軍は、以下に示す詳細なデータ収集を行った。その中には、数個戦区（戦区名は省略）及び諸軍兵種聯合作戦に必要な各種物資の消費量、特に各種燃料の消費量が含まれる。また海上作戦集団、航空作戦集団、ミサイル作戦集団及び陸上作戦集団の兵員の損耗率が含まれる。

対台湾作戦の負傷者は、少なくとも数十万人（具体的データは省略）、病床は数十万張必要。野戦手術隊はどの程度の数を準備すべきか。

鉄道運輸、海運、陸上運輸の回数、及び台数等々。

対台湾作戦は、次の各段階に分けている：

第一段階：戦略威嚇段階。”台湾独立の動き”に対して断固とした戦略威嚇を実施する。

第二段階：聯合火力攻撃。この段階は作戦が真に開始されることを意味し、ロケット軍、空軍、海軍、潜水艦部隊、陸軍の長距離攻撃火力が聯合して攻撃する。主として斬首と破壊である。

第三段階：海と空の封鎖。

第四段階：渡海上陸作戦。

第五段階：強敵（米軍）の干渉を撃破

中国軍は、各段階ごとに、各軍兵種の所要各種弾薬量、損耗率

各種燃料の量、及び現有の備蓄状況を計算している。

作戦による損耗を計算し何ヶ月戦闘継続できるか？等。

各種物資の消費、消費率等は、”機械化歩兵師団渡海作戦”、”自動車化歩兵師団渡海作戦”及び”水陸両用機械化歩兵師団渡海作戦”（この兵種は現在海軍陸戦隊に区分）ごとに、相当綿密に計算している。

各方面の数字はここでは公開できないが、ある数字について、本誌は相当疑問に思う。それは、大規模渡海作戦時の人員の損耗の問題である。中国陸軍の”機械化歩兵師団の対台独軍事闘争準備”演習報告に示す各種データを見ると、機械化歩兵師団は上陸作戦集団の第 2 梯隊の主力であり、人員の減耗率は 20% に設定されている。すなわち 1 個師団の死傷者は 2000 人である。この数字は少なすぎないか？もし台湾軍が効果的な抵抗を行ったならば、第 2 梯隊の渡海作戦集団は、東部飛行場を離陸した F-16 の厳しい攻撃にさらされる。

H-6K、SU-30MKK、J-11A が何度も台湾周回飛行を行ったが、飛行コースの多様化、南北同時並進、東海岸に到達する距離の違いが見られ、今後ますます遠距離飛行が増えると思われる。携行する弾種も様々で、H-6K は今回、KD-20 を 2 発携行した。J-11A が携行したのは R-73 及び R-27 空対空ミサイルである。ある人は、なぜ旧式の弾薬を携行したのか疑問に思っている。

中国軍の上述の意図を探求した際に発見したことは、使用された航空機は老朽

化した J-11A(これはロシアのライセンスに基づいて合法的に生産された機体である) であるが、エンジンはロシア製で信頼性が高い。

中国機は、様々な飛行方式を選択し、明らかに様々な搭載燃料で飛行している。中国空軍は、どのような状況下で、如何なる経路を飛行すれば、最良の残燃料で戦闘状態に入れるかを計算している。ロシア製戦闘機は、通常、燃料を 50% 消耗した段階で機動性が最良になる。この種の状況下で、滞空時間はどのくらい？空戦時間はどのくらい残っているか？帰還に要する時間と燃料はどのくらいか？これらは綿密な計算が必要である。これが台湾一周飛行の目的である。当然、政治的威嚇の目的もあり、台湾に対する”三戦”(心理戦、宣伝戦、法律戦) の準備でもある。

KDR の予測では：次の段階は、このような計算を行った上で、SU-30MKK にその他の武器を搭載し、再度台湾周回飛行を行い、J-16、SU-30KM2/MKK が各種空対地、空対艦武器を携行する前提に下に、最良の燃料消費量、携行弾薬等のデータを計算し、データバンクを作成すると思われる。現代のデジタル戦争は、完全にデータバンクの基礎の上に成立し、データバンクがなければ戦えない。農業戦争の時代ではないので、全て事前の見積が必要である。科学的論証が不可欠であり、米軍も行っている。

2003 年の中東戦争期間、本誌は、ドーハにあった米国中央軍司令部を参観したが、司令部全体が巨大なデータバンクであった。

日本海への進出について、目的は同じである。第一に”三戦”の原則にしたがって、日本に警告した。中国が一旦台湾と開戦したならば、日本は介入してはならない、と。次に、もし真に作戦機を日本海に進入させる必要があったならば、相当詳細な計算を行う必要があり、どの位置まで到達し、どのくらいの燃料を消耗するか？どの武器を携行するか？その位置からいかなる戦術目的のミサイルを発射できるか？したがって H-6K は KD-20 巡航ミサイルを携行した。実戦的に見れば、この飛行に意味はない。KDR は明確に説明できるが：一旦、開戦となれば、H-6K 及び SU-30MKK の損耗率は 100% となろう。対日本、或いは北朝鮮東海岸の戦略目標に対する如何なる攻撃も、H-6K は中国東北部の領土上空から類似の任務を達成すればよい。しかし軍人の思考は多様化している。データバンクを設立するには、類似の飛行計算が必要である。このほか大気の還流データ、戦場における敵の各種電磁情報の収集も重要である。これが電子偵察機を同行させるもうひとつの目的である。

一旦、大規模戦争準備が完了すると、海軍は空母をいかに運用すべきか？”対台独軍事闘争準備”における空母の運用はどうあるべきか？これらの問題について、中国海軍内部には、相当詳細な専門の研究資料、報告がある。

中国海軍は、以下のような極めて詳細な各種作戦データを作成している：  
1 個空母戦闘群の補給基準、補給にどの程度の航行時間が必要か？

燃料搭載量は、何トンか？8艘の水上艦で編成される空母艦隊を前提に計算する総合補給艦はどの程度の弾薬を携行する必要があるか？水は？燃料は？副食品は？毎日一人あたりの各種物資消費量等。

重油、航空燃料を含む燃料。J-15 戦闘機の1出撃当たりの燃料消費はどのくらいか？1日の燃料消費はどのくらいか？空母遼寧の航空燃料の備蓄は毎日どのくらいであるべきか？補給艦はどのくらいの航空燃料を備蓄すべきか？等々。東南沿海作戦方向について、応急作戦はどのくらいの航空燃料を消費するか？現在の備蓄はどのくらいか？不足か？如何に補充するか？

空母艦隊に対し、何日ごとに総合補給すべきか？項目ごとの補給は？連続して1週間作戦に投入する場合、1ヶ月以上連続して作戦に投入する場合の燃料消費、食料品の消費量等の設定。

これは、空母遼寧が実施した研究、訓練の目的の一つである。

第一は、J-15 艦載戦闘機の日常訓練、ヘリの科目訓練等を含む武器のハード面の論証である。ソフト方面は、上述の各種データバンクの設立である。台湾東海岸を1日で一周する、1週間で一周する場合、距離はどのくらいか？

どのような作戦目的を達成するべきか？潜水艦を如何に随伴させるか？

これらのことから、習近平が提議した”軍事力行使の最低ライン”は口先だけではなく、すでに具体的な実行段階に入っていることがわかる。

中国の各軍兵種は、最近数年間に大量の新型装備、各種装備に換装しているが、如何なる作戦任務を実施しようとも詳細なデータの蓄積が必要である。したがって今後、類似の軍事行動が増加すると思われる。

戦争準備のデータ収集の重要課題の1つは、武器の選択である。インド洋上で、台湾船舶を隔離する水上艦の武器は何にすべきか？

介入する強敵（米軍）の空母に対抗する水上艦及び潜水艦の武器は何を選択するか？

台湾東海岸の海上から陸地に向けてミサイル攻撃を実施する水上艦の武器は何を選択するか？

異なる武器を使用する場合、補給任務及び燃料消費の具体的状況はどうか？

したがって、推測出来ることは、これらの問題が明らかになった後、たとえ同じ型の052D型ミサイル駆逐艦が台湾東海岸に進出したとしても、搭載する武器の種類は異なる可能性が極めて高い。結局YJ-18対潜型か、或いは陸上攻撃型か？又はその他の対潜武器か？今回のデータ収集の結果によって決まる。

ここで分かったこと。：いかなる軍隊においても、作戦のデータバンクが大きくなり、種類が細くなればなるほど、戦争準備の度合いが高度になり、デジタル化作戦能力が向上する。そして多様化した作戦任務への対処能力も向上する。以上